

令和3年度 京都府立南陽高等学校・附属中学校 学校経営計画（スクールマネジメントプラン）（ 実施段階 ）

学校経営方針（中期経営目標）	前年度の成果と課題	本年度学校経営の重点（短期経営目標）
校是の「進取」「敬愛」「雄健」の具現化を図り、地域から信頼される質の高い教育を実践することにより、自分の頭で考え、人と協働し、新たな価値を創造する人を育成する。そのために、 ① 自ら学ぶ姿勢を有し、自ら高みに挑戦する生徒を育て、学力の伸長を図る。 ② 特別活動等により、知・徳・体のバランスのとれた生徒の育成を図る。 ③ 生徒、教職員、保護者が一体となって、教育内容の質の向上を図る。 ④ 学研都市の資源を活用しながら、社会の一員としての自覚を持った生徒を育成し、文化学術研究を実践する学校づくりを進める。	◇ 新型コロナウイルス感染拡大を受け、生徒の学びの保障と健康・安全の確保の両立をはかり、共通理解のもと全校体制で取り組んだ。 ◇ 生徒一人ひとりが目的意識を持って進路実現を果たした。今後は主体的・自立的に学習し挑戦する生徒の育成に向け、さらに教育力の向上を図る必要がある。 ◇ ICTを用いた教育活動を推進し、コロナ禍での臨時休校期間をはじめとする学習指導・健康観察などに積極的に活用を進めた。 ◇ 生徒一人ひとりの希望進路実現に向けた指導体制の確立をはかるとともに、新学習指導要領に対応した教育課程の編成を進めた。 ◇ 本年度コロナ禍で実施が困難であった学校行事、中・短期の海外留学や国際交流、ボランティア活動等、生徒の主体的な活動について、感染防止対策を講じつつ可能な実施方法等について検討を進める必要がある。 ◇ コロナ禍での学びの保障に向けて、電子黒板の配置等のICT環境の整備やエアコン設置等を行うことができた。今後も計画的かつ柔軟に施設管理の改善に努める。 ◇ 他校に先駆けて働き方改革に係る具体的な取組を進めてきた。今後も「働きやすさ」や「働きがい」を感じつつ、健康や精神的な充足感を得られる職場づくりを進める。	① 学力の3要素（知識・技能、思考力・判断力・表現力、主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度）をすべての生徒に身に付けさせ、ICTを活用しながら個に応じた学びにつながる研究・実践を行う。 ② 難関大学進学に向けたスパートゼミに新しく取り組み、効果的な学習・進路指導を展開する。 ③ 4つの奨励（部活動、国際交流、ボランティア、コンテスト）を継続し、生徒の主体的・協働的な活動や社会参画の機会を増やす。 ④ 校内外連携のさらなる強化により、中高一貫教育の効果的な実施と計画的な準備を進める。 ⑤ 内外の評価を活用し、生徒一人一人を大切にし、個性や能力を伸ばせるよう、学習者起点による学校の魅力化を図る。 ⑥ ダイバーシティとワークライフバランスに係る具体的な取組を継続して進める。

評価領域	重点目標	具体的方策	評価		成果と課題
教務部	学力の3要素を生徒に身につけさせるための学習内容の研究・実践及び、令和4年度からの学習指導要領実施に向けての研究を行う。	ICTを活用した授業実践を通して、ICT活用の利点を最大限発揮できる環境の整備・管理を行うとともに、SSPの活動をサポートする体制を整える。	A	B	・ICTについてはBYOD導入に向けてハード、ソフト両面で環境を整えることができた。他分掌との連携が今後、必要である。 ・観点別学習状況の評価について、大枠は策定することができた。細かい内容については実践の中で修正・改善していく。 ・令和4年度入学生教育課程についてはほぼ確定した。実施に向けて年間指導計画の作成を進め準備していく。 ・6年間を見通した教育については、特に中学3年生から高校1年生の接続について、中・高での協議を持ち、方向性を見いだしていく必要がある。
		「指導と評価の一体化」のために、新しい観点別評価に策定し、教科主任会議を通してその内容を共有し、教科の授業計画や定期試験の在り方を考えてもらえる機会をつくる。	B		
		教育課程の編成に向けて、原案の最終確定を教科主任会議等を通して行う。	B		
	附属中学校の学習内容の研究を行う。	附属中学校一期生の取組の成果と課題をもとに、中学校会議と連携し6年間を見通した中高一貫教育の在り方を協議し実践する。	B	B	
生徒指導部	生徒の主体的な活動を支える。	生徒主体の効率的かつ合理的な活動ができるよう部局顧問をはじめとする関係職員との連携を密にする。	B	B	・中高ともに生徒会と密に連携を図り、制限のある中での学校行事を行うことができた。 ・部局活動においても生徒が主体的に活動できるよう支援できた。
		学校行事における生徒の活動を充実させると共に、様々な制限下で可能な限りの活動ができるよう務める。	B		
		生徒会を中心とした校内外の活動を支援する。	A		
	中高一貫校としての組織的な生徒指導を実践する。	全教職員体制で生徒の状況をきめ細かく観察し、生徒の心的変化を見逃さない体制作りをおこなう。	A	A	・教職員間で生徒の様子を職員室等で交流できる雰囲気が醸成されていた。 ・生徒観察シートやいじめ調査を活用し生徒情報を全教職員で共有することができた。 ・生徒指導事象が発生した際に迅速に対応できた。
		学齢に応じた重層的かつ効果的な指導をおこなうと共に、協同的活動を支援する環境を構築する。	B		
		生徒指導事象が発生した際は、関係教職員との連携を迅速におこなうとともに情報共有を円滑におこなう環境を構築する。	A		

評価領域	重点目標	具体的方策	評価		成果と課題
進路指導部	学力の3要素をすべての生徒に身に付けさせるために、効果的な進学講習や自主自学の学習環境を整える。	長期休業中の進学講習の内容を教科・学年と検討・調整し、生徒のニーズに対応した学習者起点の効果的な進学講座を編成・実践する。	A	B	夏冬の長期休業中に、教科と調整をして各学年に適した進学講習を実施できた。 コロナ禍、放課後と長期休業中など可能な範囲で自習室を開放した。状況を見極めて土曜日の自学自習の学習環境の検討が必要である。 生徒が主体的に学習する際に、ICTを活用できる学習環境の整備が必要である。
		新型コロナウイルス感染症の状況を適切に判断し、放課後の自習室だけでなく、土曜日の自習室開放など自主自学の学習環境・形態を学校としてサポートする。	B		
		学習集団全体の底上げをする個別指導の手法として、ICTを利用した主体的学習について研究して実践する。	B		
	難関大学進学に向けた効果的な学習指導・進路指導の充実を図る。	高3生対象の新たなスパートゼミへの取り組みを通して、主体的・自立的に学ぶ力を身につけた集団を育成し、難関大学進学に挑戦する生徒数の増加を目指す。	A	B	スパートゼミで、放課後7限の時間帯を有効に利用して、発展的学習に主体的に取り組む生徒をサポートする体制を整えた。
		各々の学年との連携を密にして効果的な進路学習計画を立案・実施し、進路検討会（第3学年）等で担任の個別面談をサポートし、生徒の希望進路を実現するための進路指導の協働体制を強化する。	B		
		附属中学校から進学してきた生徒と、高校から入学してきた生徒が互いに切磋琢磨できる学習指導・進路指導体制を整える。	B		
	各模擬試験データの共有と分析を行う。	学級担任・教科担当者が自らFINEシステムやデジタルサービスを活用して学習指導に活かせるように、教員集団としての情報分析力を高める。	B	B	一人ひとりの教員がデジタルサービス等を活用するための更なるスキルアップが必要である。 模試データを進路指導部・各学年部で分析して教員間で情報を共有し、個別面談等に活用した。
		各模擬試験データを進路指導部内で分析し、情報を教員間で共有化するとともに、部長会や教科主任会で以後の進路指導についての協議・提案を行う。	B		
保健部	感染症対策を継続し行動変容につなげるための取組を推し進める。	保健委員会発行“Well-being”を通じて生徒目線のメッセージを発信するとともに、デジタルサイネージを活用して啓発する。保健室だよりを通じて感染症や予防対策について正しく理解させるとともに、それらの最新情報を提供する。	A	A	・粘り強く感染症対策を行った。 ・Well-beingを通じて感染症対策のメッセージを発信できた。 ・今後も流動的に対応していきたい。
		啓発指導、健康観察、体調不良者への対応等に全校体制で取り組むことができるよう情報を提供するとともに、感染症予防のための消毒を全校体制で行う。	A		
	特別な支援を要する生徒へ組織的、継続的に対応する。	学年部・担任・教科担当者等で情報を共有し、学校適応指導会議と連携を図りながら支援にあたる。	A	A	・保健部で得られた情報を学校全体で共有し支援に活かした。 ・情報共有は会議等の報告のみならず、日頃の細かな連絡を大切にしていきたい。
		関係機関との連携を密にし生徒の実情の把握に努めるとともに、個々に応じた支援を充実させる。	B		
	「自分たちの学習環境は自分たちで整える」という意識を育む。	美化委員会発行“美化委員会だより”を通じて生徒目線のメッセージを発信する。	A	A	・美化意識の活性化のため、美化委員会だよりを月に一度発行した。 ・掃除が行き届くようにトイレ掃除に手袋を配布した。 ・日々の清掃は真面目に行えているが不十分な箇所もあったので、美化指導を継続し美化意識向上に向けた取り組みをしていきたい。
		日々の清掃を丁寧に行い校内の美化に努めるとともに、教員による美化指導も充実させる。	B		

A:十分達成できている。 B:ほぼ達成できている。 C:達成できているとはいえない。 D:ほとんど達成できていない。

評価領域	重点目標	具体的方策	評価		成果と課題
図書部	図書委員の活動がより充実したものになるように活動内容を見直す。	中学生の委員会活動を隔月開催し、読書啓発活動を促す。	C	B	感染症対策実施しながら、委員会活動に取り組み、11月の読書月間を予定通り実施できた。中学生の委員会は隔月開催はできなかったが、3学期に3学年全体の活動の準備を進めている。 図書委員会だよりは予定より多い発行回数で、幅広いテーマの情報を発信できた。
		図書館に対するニーズを探り、魅力ある図書館づくりをする。また、図書委員会だより「F.I.B」を隔月ごとに発行させ、図書館の魅力を発信する。	A		
	教科担当との連携を深め、授業での図書館利用と、教科内容に関する書籍の生徒への貸し出しを増加させる。また、ICT担当との連携を深め、ICTに関連した情報収集に努め、円滑な利活用に貢献する。	授業でより有効な図書館利用ができるように、教科との情報交換を密にする。また、教科で作成した作品展示を通して、図書館に足を運ぶ生徒を増やす。	B	B	教科担当との連携を深め、館内に教科に関連する本を展示等をし、手に取りやすい環境を作ったり、声掛けをすることによって貸し出しも増えた。また、図書館前の展示スペースを有効に活用することができた。 国語科と連携し、校内のビブリオバトルを実施することができた。 ICT機器を活用した授業がスムーズにできるよう、設備を整理した。
		教科と連携をし、教科内容に関わる書籍を読ませる仕掛けづくりを工夫する。	B		
		各関連部署と連携をしてICTの円滑な利活用に貢献する。	A		
	読書活動を啓発し、生徒の目を広く社会に向けさせることにつなげる。	新聞や時事問題といった受験時の小論文、英作文に後々関わってくる書籍を読ませるような仕掛けづくりを工夫する。	B	A	生徒の目を広く社会に向けたための選書を行ったが、生徒がその本を手にする仕掛け作りは展示にとどまった。今後はいろいろな仕掛けづくりをしていきたい。 「フィブレット」は読書月間に発行し、TEAMSでの配信を行うことができた。
		「1 b o x」コーナーなどを活用し、多様なテーマの展示を行う。また、読書活動啓発のために、「フィブレット」を作成し、効果的な配布や活用方法を模索する。	A		
企画研究部	生徒・教職員の人権意識と実践の深化を図る。	教職員の人権意識の深化と具体的実践を促すため、教職員の人権教育研修会を適宜実施する。	C	B	コロナ流行にともない、行事予定の変更が相次ぎ、研修会や国際交流や生徒活動が制限された。
		生徒の人権意識を高め、地域の企業・団体等との連携強化や国際交流を通し、生徒自ら課題の発見・解決に取り組む活動を実施・企画する。	B		
	情報発信においてICTの利活用を図り、その効果を検証する。	ホームページやSNS等を活用し、動画などのツールを利用した情報発信を適宜企画・実施し、その効果を検証する。	B	B	インターネットを利用した動画配信などを行い、広報活動に関して一定の成果をあげた。協議や検討を持続し、社会の情勢に対応しながら持続可能な取り組みを考え、実行していきたい。
		SNS等を活用した広報活動の効果やプレゼンテーションについての研究・協議を適宜実施し、その効果を検証する。	B		

評価領域	重 点 目 標	具 体 的 方 策	評価		成果と課題
事務部	主体的、積極的に学校運営に参画する。	事務の専門性を生かしつつ、効果的な学校運営が行われるよう各部と調整しながら事務を進める。	B	B	会議資料から必要な情報を積極的に収集し、各部と調整をしながら事務を進めることが出来た。今後も更に各部と連携をしていきたい。
	校内の安心、安全、美化を推進する。	危険箇所を早期発見するため、月1回点検を実施し、計画的に着手すると共に、柔軟に施設管理の改善をする。	B	B	定期的に点検を実施し、アスファルトの補修、水漏れ補修等早期に対応することが出来た。今後も工夫をしながら校内の安心、安全、美化に努めていきたい。
第1学年部	高校生としての自覚を持ち、自立した行動がとれるように、しっかりと生活習慣を身につけさせる。	すすんで挨拶をする、身だしなみを整える、ルールやマナーを大切にするといった基本的な行動を日常的に促す。	B	B	基本的生活習慣を多くの生徒に見つけさせることができた。自覚を持ち自立した行動がとれるように見守る指導が充実した。一部、服装違反や携帯の使用など見られた。
		共有空間である教室や施設をきれいに使用し、自らが良好な学習環境を作り出す意識を持たせる。	A		
		日々メモや記録とすることで、高校生活を計画的に取り組むように自己管理につとめさせる。	B		
	より高い目標に向かって着実かつ主体的に学習する姿勢を身につけさせる。	予習・授業・復習のサイクルを実践できるように、教科担当と学年団が連携して生徒の学習を支える。	A	B	高い意識を持った学習集団を育成することができた。各教科の考査前などの取り組みが学習意識の向上につながった。進路の情報提供は十分でなかった。
		適宜面談を行い、生徒の自発的な学習姿勢を育み、進路に対する意識を高める。	B		
		進路指導部と連携しさまざまな情報を生徒に提供し、将来に対する展望を持たせる。	B		
	校内行事や对外活動に積極的に参加させ、いろいろな人、集団との関わりの中で人間的成長を促す。	文化祭、体育祭、学年行事等に自主的に取り組ませ、仲間との信頼関係を深めさせる。	A	A	「挑戦」という目標の下、様々な局面で積極性が見られた。特に、学校行事が中止となる中で学年行事が行えたことでクラスの結束力が高まった。生徒が主体となって取り組む場面を多く設定できたことで、集団形成に成果が見られた。
		部活動や国際交流、ボランティアやコンテストへの参加を奨励し、活動の場を広げられるようにする。	A		
		さまざまな集団活動の基本には、人権の尊重があることを日々意識させる。	B		

評価領域	重点目標	具体的方策	評価		成果と課題
第2学年部	高校生としての自立した生活習慣を確立させる。	挨拶の励行と清掃の徹底を行うとともに、SHRをはじめとして機会あるごとに、ルールの遵守や他者を思いやる心の大切さを語りかける。	B	B	学校生活のルールを遵守し、清掃にも真面目に取り組んでいる。生活記録表によって計画性のある時間の使い方ができるように促し、多くの生徒が日々を振り返り学習への取り組みを改善させた。
		生活・学習記録表等の適切な活用を通じて、自己の生活を振り返り改善する自己管理の力をつけさせる。	A		
	学習に主体的に取り組む姿勢を身につけさせるとともに、進路への意識を高めさせる。	授業を大切にさせるとともに、講習や希望制の模試の受験を積極的に勧め、さらに発展的な学習に向かわせる。	B	B	授業を大切にしている姿勢は高まっていると思われる。また、模擬試験も積極的に取り組んでいるが、大学進学にむけての発展的な学習に向かわせる機会をあまり与えることはできなかった。志望理由書を書くことをきっかけにさらに進路についての意識を深化させ、また面談を通じてしっかりした目標を設定させたい。
		進路に関わる情報を数多く提供し、面談等を通じて、自分なりの進路目標を設定させる。	B		
	学校行事等を通じて生徒それぞれの活躍の場を広げさせる。	自分たちで行事を企画・実行させる機会を作り、互いを尊重し合える集団をつくる。	B	B	昨年同様、多くの行事が中止になり、生徒の自主的な活動の機会が少なく残念であった。実施できた研修旅行、団体鑑賞及び人権学習講演会は生徒の活動は少なかったものの、それぞれが得がたい貴重な経験であった。来年度は文化祭、体育祭が実施されることを期待したい。
		各自の興味関心に応じて、部活動・国際交流・ボランティア・コンテストへの積極的な参加を促す。	B		
第3学年部	自立した生活習慣と高い規範意識を確立させ、社会に出ていく人間としての土壌を養わせる。	挨拶の励行と清掃の徹底を行うとともに、ホームルームをはじめとして機会あるごとに、ルールの遵守や他者への思いやりの大切さを語りかけることを継続する。	A	A	挨拶の励行や清掃の徹底を行い、卒業後の生き方につながる生活習慣や規範意識を概ね身につけさせることができた。
		生活や学習のリズムを自己管理できるよう、生活・学習記録表等をつけさせる。	B		
	各自に主体的な学びを継続させ、希望進路の実現に向けて全力を傾けさせる。	個人面談をこまめに行い、また担任と教科担当との連携を密にして、授業を大切にさせるとともに個々の生徒に応じた指導を行う。	A	B	三者面談を含めた個人面談を適宜行い、進路指導部や教科担当とも連携しながら、タイムリーな情報提供を行うことができた。
		進路指導部と連携して、進路への意識を高める取り組みやタイムリーな情報提供を行う。	B		
	学校行事等を通して個々の生徒に活躍の場を広げさせ、互いに協力し合える集団を作らせる。	部活動等への積極的な参加を通じて個々の可能性を広げさせるとともに、最高学年として下級生の範となる意識を持たせる。	B	B	コロナ禍で多くの学校行事が中止となり、学年でのスポーツ大会の実施などで生徒が主体的に動く機会を設けたが、不完全燃焼の感はある。否定できない。
		学校祭などの行事で生徒が主体的に活動できる機会をできるだけ多く作り、自己肯定感を高めさせるとともに、互いを尊重し合える豊かな集団作りをさせる。	C		

評価領域	重点目標	具体的方策	評価		成果と課題
サイエンスリサーチ科	主体的に探究する意欲を育ませ、科学的な見方や考え方を身につけさせる。	関西文化学術研究都市の研究機関や近隣の大学との連携を深め、生徒が第一線の研究に触れる機会を充実化する。	B	B	夏季実習、ATRや京大でのサイエンス講座を実施できた。連携先とのつながりも継続・強化することができた。
		研究活動を行う上で基盤となる知識・手法を教科横断的に学ぶ授業プログラムを構築する。	B		今年度から、サイエンスⅠにて「探究活動の基礎」を実施し、担当教員の様々な専門性を生かした授業を行うことができた。
	校内外での研究発表を活性化し、本学科の魅力発信に努める。	オンラインツールを活用した新たなプレゼンテーション（研究成果発表）の在り方を研究するとともに、そのスキル向上を図る。	B		Zoom、LincBiz、SpatialChatなどのツールを利用した研究交流を実施し、その有用性や今後の課題を見いだせた。
		科学コンテストや発表会への参加を促し、その取り組みをサポートする体制を強化する。	B		気候変動学習プログラムに6名の高1生徒が参加し、約5ヶ月に渡って大学教員の指導を受けた。このような活動を増やしたい。
附属中学校	特色ある中高一貫教育の確立のための実践研究を行う。	附属中学校での教育実践を各教科内で共有し、高校の実践につなげる。	A	A	ロイロノートやTeamsなどを活用し、学びの保障としてオンライン授業を実施するなど積極的な実践ができた。また、高校への実践を踏まえた研修での実践報告をすることで、連携を図ることができた。
	校内や校外の人材との交流を通して、人間的な成長を促す。	学習活動や学校行事に主体的に取り組ませる中で、仲間意識や人格の成長を図る。	A	B	コロナ禍で学校行事がなかなか実施できないなか、学活でのレク、ダブルアップセミナー、生徒会主催の学年を超えた企画等を主体的に取り組むことができた。今後は状況を見ながらボランティア活動等、幅を広げた活動に取り組みたい。
		部活動やボランティア活動への参加を促し、活動領域を広げ人間的な成長を図る。	B		
	教育課程の充実を図るための研究を行う。	中高一貫校としての教育実践、新指導要領を踏まえ、教育課程の編成について研究を行う。	B	B	中学校会議や担当者会議で、授業実践や学びの課題、評価等についての協議、情報共有を積極的に実施した。今後も継続して協議を重ねていきたい。

評価領域	重点目標	具体的方策	評価		成果と課題
国語科	教材研究・指導法研究により授業の質を向上させる。	ICT機器を効果的に活用する。	A	B	板書スライドの投影や採点ソフトの導入をした。一人一台タブレットにむけて、効果の検証や教育内容の更なる研究が必要である。
		生徒自身が主体的に思考・表現することができるような授業を行う。	B		
	家庭学習習慣を確立させ、希望進路の実現及び実社会に対応できる国語力の育成を図る。	予習・復習の具体的内容を指示し、小テストを効果的に行うことで、生徒に学習習慣を確立させ、基礎知識・語彙を定着させる。	A	B	小テストにより基礎知識の定着を図ったが、生徒により大きな差がある。教材に関連する読書の推奨や、多様な文章に触れさせる指導が必要である。感染症拡大の影響もあり、図書館の活用は十分に行えなかった。
		共通テストや難関大学の入試問題を研究し、生徒の希望進路実現につなげる。	B		
		生徒が広い視野を持てるよう、読書を推奨したり図書館を活用したりする。	B		
	中学校併設のメリットを活かした指導体制を充実させるとともに、中学生には六年間を見通した指導を行う。	高校での観点別評価導入に向け、附属中学校での実践をもとに生徒を多面的に評価する方法について検討する。	B	B	観点別評価について、附属中学校の実践例を基に検討を行った。高校での運用は手探りの状態であり、特に「主体的に学習する態度」の評価については更に検討をする必要がある。
		6年間一貫性のある指導を行うため、教科で情報共有を密に行うとともに、中高を問わず、相互に授業見学を行う。	B		
地歴・公民科	主体的・対話的で深い学びを実現する。	主体的・対話的で深い学びの実践方法・評価方法について、教科内で共有する。	B	B	観点別評価の手法について、検討を重ねた。総合的な探究の時間の実施内容については、昨年度の反省を行い、今年度は新たな取り組みを行った。来年度の内容について踏襲するか、あるいは変更するかはこれから検討する。
		総合的な探究の時間の実施内容について教科内で検討し、来年度以降の内容を確立させる。	A		
	中高一貫を見通した指導を行い、附属中学校から高校への滑らかな接続を果たす。	新学習指導要領実施を見据えて、中高一貫教育の6年間の指導方針について検討する。	B	B	今後も中学校を担当したことのある教員を中心に連携をとり、指導内容について検討、精選を進めている。
		附属中学校でこれまで実施してきた指導を再検討し、指導内容の整理・再検討を行う。	B		
	新学習指導要領や大学新入試を踏まえた授業を行う。	新入試の傾向を各科目担当で分析し、指導内容を検討・共有する機会を学期ごとに設ける。	B	B	新入試について、今年度顕著であった思考力を問う問題について、教科会議で検討することができた。スパートゼミについて、今年度は世界史・日本史のみの開講となったが、来年度の講座内容や開講科目についてアンケートをもとに検討できた。ICTを活用した授業を推進している教員が増えてきて、その実践内容について交流することができた。
		スパートゼミの効果的な活用方法について、教科内で検討・共有する機会を学期ごとに設ける。	B		
		ICTを活用した生徒主体の授業の実践を推進し、実践内容を検討・共有する機会を学期ごとに設ける。	B		

評価領域	重点目標	具体的方策	評価		成果と課題
数学科	学力の3要素をすべての生徒に身に付けさせる指導方法を確立する。	個に応じた学習指導を行うことで、基礎的な数学力を定着させるとともに、個々の数学力がより向上するような格調高い授業を展開する。	B	B	・生徒全員がタブレットを持っている状態での授業スタイルの確立が急務である。またそれに伴い、生徒の学力向上に繋がるタブレットの利活用の仕方も、教員間で積極的に共有する必要がある。 ・発展的な問題をグループになって取り組ませることで、相互に理解を深めさせた。 ・普段の授業と並行して、復習教材を適宜織り交ぜた。
		希望進路に応じた課題設定を行うことで、計算力及び論理的思考力、記述力を養い、また適宜発表活動等を取り入れながら、希望進路が実現できる数学力を培う。	B		
		ICTを利活用することで、すべての生徒が様々な方向から教材への理解を深められるよう工夫する。	B		
	数学を楽しみ、探究する精神を育成する。	学年や実態に応じて、生徒が興味関心を持って主体的に学び合えるような教材や指導方法を教員間で共有し、実践する。	B	B	・グループワークを積極的に取り入れることで、生徒が興味関心を持って、主体的に取り組める環境を作った。 ・数学が日常のどの場面で使われているかを適宜授業内で話した。 ・互見授業などを通して、生徒が興味関心を持つような教材を情報交換する。
		京都・大阪数学コンテストを始めとするコンテストや数学検定などへの積極的な参加を呼びかけ、数学の魅力・面白さに触れる機会を増やす。	B		
		数学の枠を超え、教科横断型授業を展開し、数学の必要性・有用性を生徒に実感させる。	C		
	中高一貫教育および難関大学進学に向けた指導体制の充実及び教科指導力の向上をはかる。	6年間を見通した授業の進度及び指導方法について、担当教員が交流する場を週1回以上設定するとともに、教科会議で進捗状況を共有する。	B	B	・スパートゼミは一定の効果があつたので、総括を行い次年度に繋げていくべき。 ・中高一貫の部分はまだまだ課題が多い。高校への進学に際し、課題に対する意識・量をどのように変えていくかを考える必要がある。 ・中学高校教員の交流の場を充実させる。
		スパートゼミの進捗状況を、教科で共有する場を適宜設定し、難関大学進学に向けた指導方法を確立する。また、生徒の進路実現のため、難関大学へ挑戦する意志を持たせ続ける仕掛けを行う。	A		
		夏期講習や冬期講習の内容に関する議論や振り返りの場を設けることで、より充実した講習を開くことができるようにしていく。	B		
理科	個々ならびに組織的な教科指導力の向上を目指す。	6年間を見通した中高一貫教育における理科教育課程を実践し、組織的な指導体制の構築をはかる。	A	A	6年間を見通した指導体制の構築をはかることができた。また、ダ・ヴィンチにおいて新たな取り組みを行うことができた。しかし、模試結果の分析・活用や生徒情報を共有しての組織的な指導はさらに進めていく必要がある。
		サイエンスの活動や附属中学校におけるダ・ヴィンチにおいて新たな取り組みを模索する。	A		
		科目主担当を中心にして模擬試験の結果等を分析・検討し、生徒の学力や課題を共有して学力伸長に向けた組織的な指導方法を工夫して、難関大学進学など自ら高い目標をもって挑戦する生徒を育成する。	B		
	新学習指導要領に対応して、ICT活用の充実を図る。	個に応じた学習内容の提供及び思考力・判断力・表現力を育成するために、ICTの効果的な活用方法をさぐり、各々の実践研究を教科内で共有する。	A	A	附属中学校におけるロイロノートやポケットラボの活用、高校での電子黒板の活用など、効果的にICTを利用した。しかし、他分掌や他教科との連携はさらに強化していく必要がある。
		事務部をはじめ各分掌や他教科と連携・連動して、効率的にICTを利用していく。	B		

評価領域	重点目標	具体的方策	評価		成果と課題
保健体育科	卒業後も豊かなスポーツライフを実現する資質を育てる。	自己の体力の現状を把握し、体力向上の方策を考え実践させる。	B	A	コロナ対策を行いながら、自己の現状に合わせた計画立案、実行する時間確保や、新体力テストの結果を元に体力向上を図ったが、例年のような体力向上を図ることが困難であった。集団で運動に取り組むことにより、コミュニケーションスキルの育成につなげることが出来た。 健康上配慮の必要な生徒に対して関係分掌との連携を継続し、適切に対処する。 附属中学校との併設及び選択制授業の実施に伴い、施設・設備の活用方法を工夫し、更衣室での3密回避対策をさらに継続していく。 新学習指導要領改訂の方向性をふまえ、ICTの活用も取り入れながら学習内容や授業展開の改善を行う。
		運動の場面で、公正、協力、責任、参画に対する意欲を高める態度を養う。	A		
		学習指導要領改訂の方向性に合わせ、生徒の実情に応じた選択制授業を実施していく。	A		
	現代における健康課題について知識、理解を深める。	課題学習の研究の質を高め、現代における健康課題を幅広く考える視点を養う。	B	A	発表や定期テストの実施により健康課題を幅広く考える意識を養うことができた。 主体的により深く探求できる課題の提示方法を工夫し、さらに広い視野で知識を得ようとする態度の育成やICTの活用を進めたい。
		薬物乱用について正しい知識を身につけ、適切な行動をとることができる態度を養う。	A		
芸術科	表現や鑑賞の学習を通して、多様な芸術についての見方・考え方・とらえ方（思考力・判断力・表現力）を学び、芸術を愛好する心情を育てる	中学校との関連をふまえ、表現や鑑賞の基礎・基本的事項をしっかりと把握させる。	A	B	・芸術活動を通して互いに認め合う力を醸成できた。
		鑑賞や制作・発表を行い、多様な表現活動を通して互いに認め合う力が身につくよう支援する。	B		
	自分の言葉で作品を鑑賞・批評する力を育む	日本の伝統的な芸術と西洋の伝統的な芸術の類似点や相違点を感じさせ、自ら表現することができる力を養う。	B	B	・制限下においても芸術の必要性や重要性を、発表・批評活動によって養うことができた。
		グループ発表・学習をおこない、言語活動の拡充を図り、自らの言葉で諸芸術を批評できる心情を育てる。	A		
	生涯にわたり芸術を愛好する心情を育む	教員間で研究授業や互見授業週間、研修会等を通して、教授方法などを研究し、授業改善に努める。	A	A	・ICTやタブレットを効果的に用いるためのスキルを向上させることができるよう更に努める。 ・制限が多かった音楽の授業において、新たに鑑賞、創作領域での教材を研究することができた。
		学習者の知的好奇心を喚起させるような授業が展開できるよう努める。	B		
		多様な芸術について理解を深めさせるため、視聴覚教具を用いて鑑賞教材を研究し、教科指導力の向上に努める。	A		

A:十分達成できている。 B:ほぼ達成できている。 C:達成できているとはいえない。 D:ほとんど達成できていない。

評価領域	重 点 目 標	具 体 的 方 策	評価		成果と課題
英語科	基礎学力を定着させ、希望進路の実現に向けて生徒の学力の伸長を実感させる。	学習の仕方を各学年で共通して具体的に指導し、日常的に家庭学習に取り組ませ、学年に応じた自学自習の習慣を身につけさせる。	A	B	中学校はオンラインレッスンの活用により、家庭学習や個別のレベルにあった指導をすることができた。ロイロノートやタブレット上のオンライン教材も日々の学習に活用することができた。今後もICTの効果的な使い方について研究・実践を積み、高校においてもさらに活用していきたい。
		生徒個々のレベルと目標に応じた指導をより効果的にするために、ICTの利活用をしながら、個に応じた学習内容を提供し、効果的に個別指導を取り入れる。	B		
		教科書準拠のオンライン教材活用について研究・実践を進める。	B		
	英語を使って積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成する。	生徒が使える語彙指導の充実を図る。	B	B	毎授業で語彙指導・音読指導を取り入れ、基礎学力の伸長に努めた。今後はリスニング力の増強、および、自分の意見を書いたり話したりする機会を増やしていきたい。
		発音指導や音読指導を中心に聞く力を伸ばし、ある程度長さのある英文を意味のかたまりごとに理解し、速読力を伸ばす。（リスニング・リーディング）	A		
		授業で学習した内容に対して、自分の意見を持たせ、今ある英語力を最大限に生かし、英語で書いたり、話したりする機会を充実させる。（ライティング・スピーキング）	B		
家庭科	生活の営みに係わる見方・考え方を働かせ、主体的・協働的な実践活動・体験活動を通じて、よりよい生活の実現を目指す。	家庭や地域における生活の中から問題を見出して課題を設定し、解決策を構想し、実践させる。	B	B	生徒発信の継続的な取り組みについては、様々な場面を想定して発信できた。フィードバック方法について、次年度以降検討していきたい。成人年齢がいよいよ引き下げとなる。より身近に感じ、準備ができるよう次年度以降も指導に努めたい。
		生活に根付かせる取り組みとして、家庭との協力による復習の機会や年間を通した継続的な取り組みを生徒発信により充実させる。	B		
		成人年齢の引き下げを意識した授業内容の充実に努める。	A		
	中高一貫教育の円滑な実施と、6年間を見通した指導を行う。	附属中学校一期生の学習の成果と課題をもとに、高校に繋げる家庭科教育の在り方を研究する。	B	A	ICTの利活用については教材の提示や板書、課題の送受信など授業の様々場面で、積極的な活用を心掛けた。高校の次年度以降の本格実施に向け、さらに研究を重ねて効果的に活用したい。
		ICTの利活用について、効果的な学習指導のための研究を継続し実践を行う。	A		
		研究授業や研修会等を大切にし、授業改善に努める。	A		

評価領域	重 点 目 標	具 体 的 方 策	評価		成果と課題
情報科	情報について科学的な見方や考え方を養い、活用できる知識や技術を身に修得させる。	情報の科学的理解と、情報の収集、分析、活用、発信等の実習を通して、問題の発見とその解決の方法を習得する。	B	A	情報を科学的に理解し、問題が発生した場合にその解決方法など学んだ。また、プレゼンテーション実習については、発表するテーマを身近なものとし、探究発表でもそのスキルを生かせるようにした。
		将来、必要とされるコンピュータリテラシーを習得させる。また、プレゼンテーション実習等を通じてコミュニケーション能力を養う。	A		
	情報倫理を身につけ、情報社会に積極的かつ公正に参画する態度を育てる。	インターネット、SNS、電子メールや携帯電話及びスマートフォンなどの利便性と信憑性・危険性を理解、把握させる。	B	B	ネット社会における利便性や危険性などを様々な問題事象から理解した。また、著作権について詳しく学び、その保護の意味や重要性について深く学んだ。
		著作権保護の重要性を理解させる。	A		
	教員の指導力を向上させる。	情報に関する最先端の内容の研究と指導法の研修を継続的に行う。	A	B	TTIについては、実習時にはほぼ毎回実施でき、例年と比較してかなり多くの回数を行うことができたため、生徒はより深い技術を身につけることができた。また、プログラミングについて、その指導法を研修し、効果的な教材を作成した。
		ティーム・ティーチングを有効に活用できるよう研究を行い、連携を密にする。	B		

学校運営協議会による評価	・新型コロナウイルスの感染対策を行いつつ、生徒の学びや進路保障のためにも授業日数等の確保に今後も努めていただきたい。 ・新型コロナウイルスの感染拡大により様々な学校行事が感染防止のため実施が困難であった。来年度は感染対策を講じて学校行事を可能なものから実施していければと考える。行事の実施に向けてできることがあればPTAとしても協力していきたい。 ・高校3年生に本年度から進路保障の取組として新たにスパートゼミが導入された。授業での学びから、さらに生徒一人一人が主体的に選択して学習できる機会としてこのような場があることはありがたい。 ・長い人生の中で真摯に学習に打ち込める時期や機会は限られている。将来の目標に向かって受験という機会を通して学び成長していくことが生徒にとって大切である。 ・教育活動へのICT導入については効果的な活用方法について模索していくこととなる。 タブレット端末はあくまでも1つのツールであり、学びの充実にどのように生かしていくかといった視点が大切である。情報社会において、生徒自らが正しい使い方ができるよう情報モラルやネットリテラシーについても理解を深めるような授業も進めていただきたい。
次年度に向けた改善の方向性	・教科横断的な活動により生徒の視野を広げ、知識や技能を活用する楽しさを経験させる。 ・新型コロナウイルス感染拡大防止対策を講じ生徒の健康・安全を守るとともに授業や学校行事等の生徒の学びの保障に努める。 ・学びの充実に向けたICTの効果的な活用行っていくとともに、情報モラルやネットリテラシーについても教育活動の様々な機会を通じて啓発指導を行っていく。